

時評

佐藤洋一郎 総合地球環境学
研究所教授



最近「持続可能性」という語をよく耳にする。農学者である静岡大の前副学長・中井弘和さんはもう十年以上前から「持続可能型農業」という語を使っておられた。先見の明というところだが、最近もつばら経済学者らがこの語を使っている。「持

続可能性」という語は、解釈によってさまざまな意味にとることができ。社会が「これからもずっと発展すること」という意味にとる人もいる。しかし、「先進国だけが利益を享受し途上国が損をする体制が『持続』したのではたまらない」という途上国側の意見もある。結局、

「持続可能性」

万人のための持続可能性は実現が難しい。私も最近、別の意味から、経済面での「持続可能性」という語の使用に懐疑的である。私の疑問は次の問いから始まる。

人間の社会は、果たして今までずっと、つまり持続的に発展を遂げてきたのだろうか。決し

七年の時には町の大半は焼失し人口の何割かは失われ、首都機能はおろか都市としての機能さえ失った経験を持つという。私はこうした現象を「崩壊」と呼ぶのがよいと思っている。

日本列島では稲作が二千年の長きにわたって続いたといわれるが、それはほとんど幻想に等

崩壊の原因は、火山噴火、洪水など自然現象ばかりではなかった。戦争や政情不安定などの人為的現象もあった。それに、自然現象と思われる洪水や伝染病なども見方によってはすべて人為的現象である。崩壊の原因は、どうやらきわめて複雑だ。ある社会がなぜ崩壊とい

う終焉のときを迎えたか、その理由を解き明かすことはよりよ

社会は崩壊繰り返し発展

てそうではない。とくに、国単位ではなく地域単位というぐあいに、人間の社会はしょっちゅう挫折を繰り返し、ときには大きな混乱を経験してきた。「千二百年間都であり続けた」ことを誇りに言う京都でさえ、少なくとも

い未来のために欠かせない作業となる。

数限りない崩壊の事実を目を背けて今までの日本社会がずっと発展を続けてきたかのように歴史を描き出すとするなら、「持続可能性」の語は将来大きな罪を背負うことになると思うのである。

膨大である。日本の社会は決して持続的な発展を続けてきたわけではないのである。

ある。

執筆者略歴

さとう・よういちろう氏 京都大学大学院農学研究科修士課程修了。静岡大助教授を経て2003年10月から現職。植物遺伝学専攻。著書に「稲の日本史」(角川書店)「DNA考古学のすすめ」(丸善ライブラリー)など。